

たこと（原註）から、本格的に始まった。彼らの一人の言葉を借りると、聖書が社会主義シオニストに「パレスチナの地に対する我々の権利を証明する神話を提供」した、というのである。（10） 彼らは、ヘブライの農民、ヘブライの羊飼、ヘブライの王、そして彼らの闘いを聖書の中で読み、それをヘブライ民族誕生に関する古代黄金時代を記述するものと自己流に解釈したのだ。そのため、彼らは厄介なパラドクスを抱え込んだ。何しろユダヤ人生活の社会主義的世俗化を推進し、それをパレスチナで実現するための入植を正当化するために聖書を使うという、水と油を融合させる離れ業を使つたのだから。換言すると、神を信じないのに、神がパレスチナを約束したと説いたのである。

多くのシオニズム指導者にとつて、聖書のパレスチナ記述を利用するのは目的実現の手段としてであつて、信仰がシオニズムの本質ではなかつた。このことはテオドール・ヘルツルが書いたものにはつきり表れている。英国ユダヤ人社会の新聞『ジュナイツシュ・クロニクル』に書いた有名な論説（一八九六年七月一〇日）の中で、彼は、パレスチナにユダヤ人国を建設することを聖書に基づいて説明しているが、そのユダヤ人国は当時のヨーロッパの政治思想や文化思想に基づいて運営されるのが望ましいと述べている。彼は自身の後を継いだシオニストよりもはるかに非宗教的人物であつたように思われる。実際、彼はユダヤ人国建設の候補地に関しても、パレスチナだけに拘らなかつた。パレスチナがだめなら、たとえばウガンダを約束の地

シオンにしてもよいと考えたほどだ。他にも南北アメリカ大陸やアゼルバイジャンも候補地として検討した。（11） しかし、一九〇四年のヘルツル没の後、後継者たちはユダヤ人のホームランドはパレスチナ、約束の地パレスチナはユダヤ人の神聖な権利としたので、聖書がそれまで以上に重要な手段となつた。

ポスト・ヘルツル・シオニズム運動のパレスチナへの執着は、英国やヨーロッパのキリスト教シオニズムが強化されたために、より強くなつた。聖書を研究する神学者から「聖地」を発掘調査する福音主義者考古学者まで、ユダヤ人のパレスチナ入植、つまり「ユダヤ人帰還」を神が定めた世の終わりの前触れであり、終末論信仰を証明するものと歓迎した。ユダヤ人のパレスチナ帰還を救世主の再臨と死者の蘇りの先駆けと考えたのである。このわけのわからない宗教思想のおかげで、シオニストのパレスチナ入植事業は大いに助けられた。（12） しかし、この宗教思想の背後には昔ながらの反ユダヤ主義があつた。ユダヤ人社会をパレスチナへ移すことは宗教的ビジョンであると同時に、ユダヤ人がいないヨーロッパを実現することにもなる。ヨーロッパからユダヤ人を追い出し、ユダヤ人のパレスチナ帰還（その後ユダヤ人がキリスト教に改宗し、改宗を拒否するユダヤ人は地獄の業火に焼かれる）によつてキリスト再臨という神の構想の実現が促進されるという二重の利益を意味するのだ。

それ以来、聖書はシオニストのパレスチナ植民地化を正当化する路線図となつた。歴史的に

sapientia
サピエンティア 55

Ten Myths About Israel

イスラエルに関する 十の神話

Ilan Pappé

イラン・パペ [著]

脇浜義明 [訳]



法政大学出版局